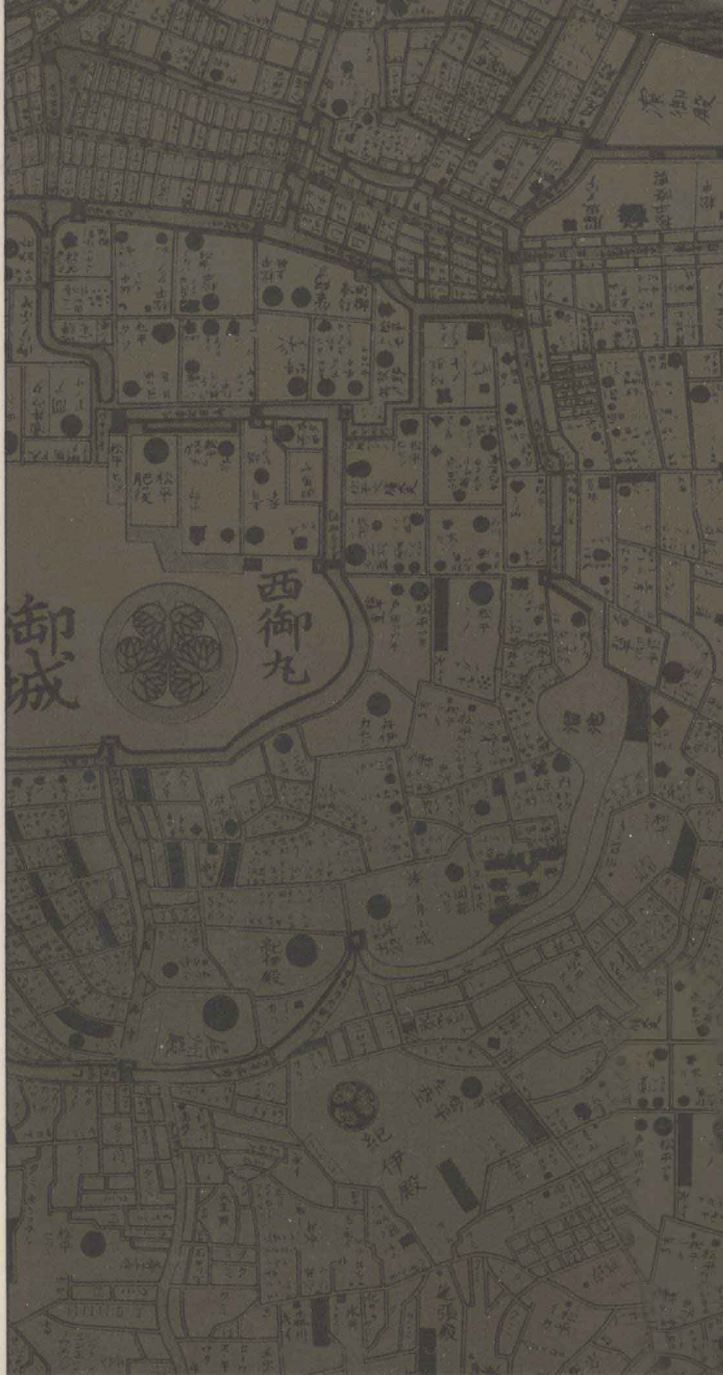


江戸シリーズ

江戸文学と中国

諏訪春雄
日野龍夫 編



江戸文学と中国

諏訪春雄
日野龍夫 編

〔編者・執筆略歴〕

神田 秀夫 (かんだ・ひでお)
1913年東京都生まれ。東京大学卒業。武蔵大学人文学部教授。

宗政五十緒 (むねまさ・いそお)
1929年岡山県生まれ。京都大学大学院卒業。龍谷大学文学部教授。

徳田 武 (とくだ・たけし)
1944年群馬県生まれ。早稲田大学大学院卒業。明治大学専任講師。

摺斐 高 (いび・たかし)
1946年福岡県生まれ。東京大学大学院卒業。白百合女子大学専任講師。

中野三敏 (なかの・みつとし)
1935年佐賀県生まれ。早稲田大学大学院卒業。九州大学文学部助教授。

小西 甚一 (こにし・じんいち)
1915年三重県生まれ。東京文理科大学卒業。筑波大学教授、副学長。

高田 衛 (たかだ・まもる)
1930年富山県生まれ。早稲田大学大学院卒業。東京都立大学助教授。

前田 愛 (まえだ・あい)
1932年神奈川県生まれ。東京大学大学院卒業。立教大学文学部教授。

水田紀久 (みづた・のりひさ)
1926年山口県生まれ。大谷大学卒業。関西大学文学部教授。

日野龍夫 (ひの・たつお)
1940年東京都生まれ。京都大学大学院卒業。国文学研究資料館助教授。

諏訪春雄 (すわ・はるお)
1934年新潟県生まれ。東京大学大学院卒業。学習院女子短期大学教授。

江戸シリーズ④
江戸文学と中国

定価 九八〇円

昭和五十二年二月十日 印刷
昭和五十二年二月二十日 発行

編者 諏訪春雄
日野龍夫

編集人 森 千人

発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中区堀内町

印刷 中央精版
製本 大く製本

企画・編集 千人社
電話 三(三九)六八四

0021-508014-7904

目 次

長江流域と日本列島

神田秀夫 七

中国からの刺激

仮名草子の背景

宗政五十緒 元

読本と中国白話小説

徳田武 五

江戸の漢詩人

揖斐高 七

漢文戯作の展開

中野三敏 一〇

作家と作品

芭蕉と唐宋詩

小西甚一 一三

『雨月物語』の世界

高田 衛 一〇

艶史・伝奇の残照

前田 愛 一六

文学の周辺

文人趣味

水田紀久 一八

儒学と文学

日野龍夫 二五

海彼の風説

諏訪春雄 三六

あとがき

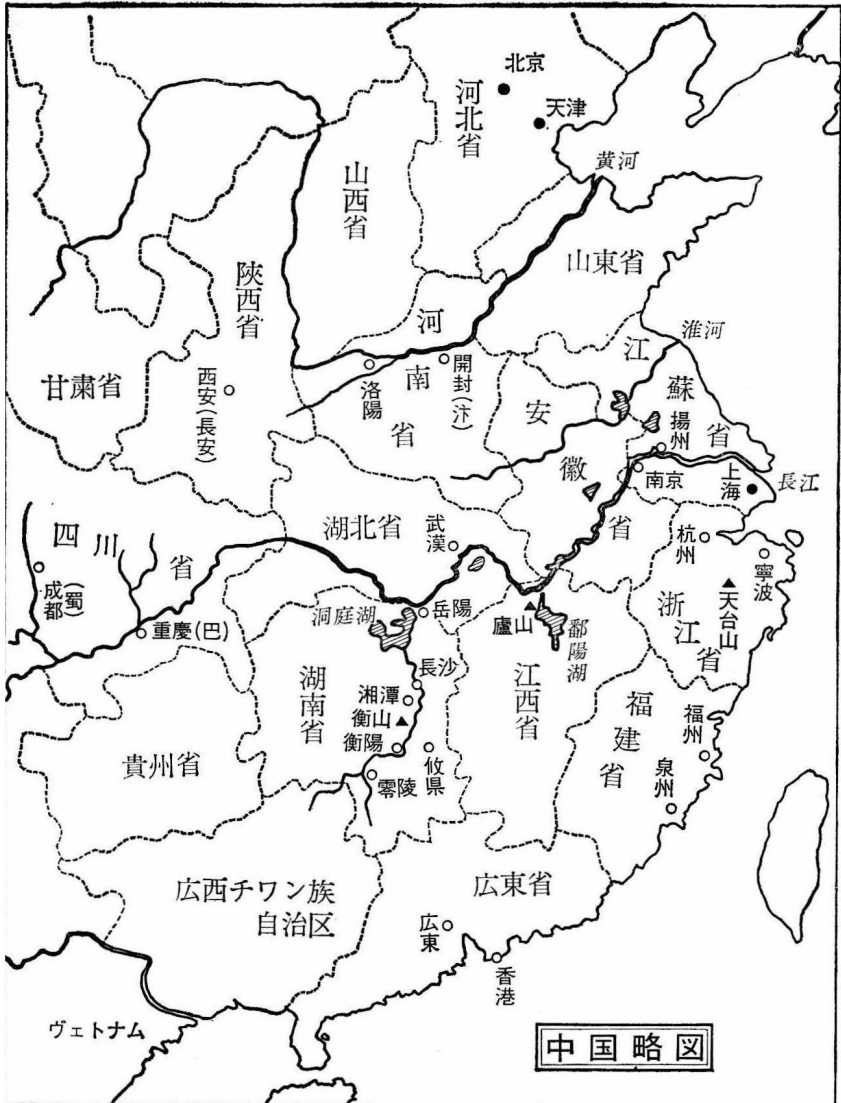
装
幀
河原宏治

江戸文学と中国

日 諷
野 訪
龍 春
夫 雄
編

長江流域と日本列島

神田秀夫



地域としての黄河・長江・日本

私たちは蒙古襲来（二七四・二八二）の時以外、騎馬民族に踏み込まれたという実感を持っていない。その蒙古襲来の時だつて、神風が追つ払つてくれたなどと、のんきなことを言っていた。

中国でも、長江（揚子江）流域は、その点、日本列島とよく似ていて、直接に騎馬民族の馬蹄に踏みこじられた経験というものをほとんど持たない。南宋が亡びた時（二七六）、鄂州（湖北省武漢）から来た蒙古軍は、宋朝が降伏したので、それほど臨安（浙江省杭州）を荒さなかつたらしい。『十八史略』の大尾にあるのは、一部の抗戦派が海に浮かんでのち三年間の話である（二七六）。長江流域の人びとがいま記憶しているのは、むしろ、騎馬民族ならぬ日本軍が行なつた南京虐殺（二九三）の方であろう。まことに悔恨回心すべきいたましい事件である。史上、たった一度、南京虐殺に数倍した残酷事件といえ、明が亡びる時、清軍が揚州を陥れ、十日間に八十万人を殺した（二六五）ことだけである。今でも佐藤春夫訳で読まれている『揚州十日記』にくわしい。

かように概していえば、騎馬民族との接触が、直接にはほとんどなかつた日本列島や長江流域に比して、およそ異なつた状況にあつたのは黄河流域である。

黄河流域にとつて、長城以北との緊張関係は、まだ長城などなかつた西紀前七世紀、すなわち春秋の大昔からであり、皮肉ない方をすれば、現在に至るまで、である。始皇の秦を経て、空前絶後ともいふべき漢王朝は成つたが、しかもなお匈奴は最大の外患として残つた。やがて匈奴は長城以南に

はいり込み、西紀後、四世紀になると、洛陽・長安から晋朝を逐い(三二・三六)、黄河流域をいわゆる五胡十六国の舞台とした。逐われた晋は建康(南京)に遷つて、いわゆる東晋となり、続く五・六世紀は南朝(宋・齊・梁・陳)と北朝(北魏・北齊・北周)とが対峙したまま推移し、北朝から隋が起つて南朝の陳を亡ぼす(五六・七)まで、二百七十八年間も南北統一は失われていた。唐朝(六八・九七)のあとも五代十国の分裂があり、宋朝(九六〇)が立っても遼(契丹)・西夏(党項)・金(女真)の北患は去らず、靖康二年(一一二七)、金軍に首都汴京(河南省開封)を陥れられた宋朝は、八百年前とおなじように、ついに臨安(浙江省杭州)に走った。いわゆる南宋であるが、それも前記のごとく蒙古に征服され、明が起つて南から北へ押し返す洪武元年(一三六八)は、日本で言うところ、すでに足利義満が將軍となる年である。しかるに明朝(一三六八・一六四四)のち、またしても中国は、北から女真族の一支である清朝(一六四四・一九一二)を北京に迎えねばならなかった。こう書いてみると、ほとんど年表ができてしまうほど、黄河流域の民の騎馬民族との抗争は、長きにわたる深刻な歴史的課題であり、この地域にとって不可避の運命だった。

今日なお漢民族は、政治・外交に長けていること、七億の人民をまとめて、世界にその地位と役割とを認めさせているので知られようが、その資質は、彼らの故郷である黄河流域が負うた苛酷な運命、騎馬民族との抗争の無数の経験のなかでできたえられ、みがかれたものだと言わねばならない。

例が大昔になって恐縮であるが、『春秋左氏伝』の襄公二十七年の条を見ると、小国である宋の宰相向戌が、大国の晋と楚とをはじめ、齊・秦・鄭・衛・邾・滕・蔡・曹・許など十余個国の代表を招いて、弭兵(休戦)会議をやっている(前四七)。なんのことはない、黄河流域で、二千五百年前か

ら国連の会議の練習をしていたようなものだ。当時の晋・楚が、今の米・ソみたいなものだったのだから。

かような苦勞をほとんど知らない長江流域は、苦勞した黄河流域の政治力に押しまくられざるを得なかつた。かくて長江流域には、もう一つの運命というか、その受身の姿勢からくる、もう一つの地域としての性格が生れた。いつも黄河流域の政府の矛盾のしわ寄せのなかで暮し、もうがまんがならんという時だけ爆發する。古来、黄河流域の首都に対する反乱の口火をつけた者は、ほとんど毎度、長江流域から起っている。「王・侯・將・相、寧ぞ種有らん乎」で記憶される陳勝・吳広の反乱(前三〇)は淮水の流域から起つたし、黄巾の乱(一八四)の源泉となつた五斗米道の創始者張陵は、今の江蘇省の西北部に生れた人だつた(大淵忍爾「道教の形成」大修館版中国文化叢書「宗教」所収)。南遷したあとの晋の滅亡も、水仙孫恩のひきいる浙江省の反乱(三三三)によるところすこぶる大きい。隋の煬帝も江都(江蘇省揚州)で殺されている(二六八)し、唐末、黄巢の乱も、いったん長江流域を経めぐつてから洛陽・長安へ進撃している(二五八)。元末、方国珍の反乱(二二二)は浙江省から、徐寿輝・陳友諒の反乱(二五二・二五三)は湖北・湖南から、張士誠の反乱(二五四)は江蘇省から、明玉珍の反乱(二六二)は四川省から起つた。太平天国の反乱(二八二～二八六)は広東・広西から、辛亥革命(二九二)は湖北省の武漢から、蔣介石の率いた北伐(二九三)は広東省から、毛沢東らの長征(一九三四)は江西省から始まつた。

こういう黄河流域と長江流域との動きは、日本列島にも影響を与えずにはおかなかつた。ある意味では日本列島の歴史は、黄河・長江両流域の動きとリズムを合せてきているようなところさえある。たとえば、五胡十六国の時代こそは、百済にとつても新羅にとつても、倭にとつても独立の好機だっ

た。この時を除いては、九州と近畿とを一つにして瀬戸内海日本（仮称）を作る機会はなかった。また、東晋から南朝にかけての四・五・六世紀こそは、右のようにして独立した倭の、五王たちをはじめとする古墳時代の倭人たちが、はじめて中国語を学んだ時代だった。今日なお日本語の字音にのこっている呉音の根深さは、この東晋から南朝時代における中文学習の痕跡なのである。また、日本人の読んだ『論語』『老子』などが北本ではなく南本だったらしいことも、武内義雄氏の研究でほとんど明らかになっている（『論語の研究』『老子の研究』など）し、万葉の歌人が読んだことが知られている『文選』や『玉台新詠集』のごときも、『文選』は梁、『玉台新詠集』は陳、いずれも南朝六世紀の選集である。

また、日本に禅宗や朱子学や水墨画その他をもたらした第二次の中国文化輸入は、平清盛あたりからはじまったが、それは靖康の変（一一二七）で宋が南渡して以後の時代である。

かように日本列島に根づき、芽ぶいた中国文化は、漢民族が騎馬民族との戦いに大敗して、黄河流域の河南省から、長江流域の江蘇省や浙江省に逃げこんでいた時期のものが多くいうことは、私には非常に重要な徴候のように思える。日・明の勘合貿易にしても、中国側の窓口は宋代以来の浙江省の明州（元代の慶元、今の寧波）にあり、この前後、盛んに活動した禅僧たちは、やはり長江流域から中国文化を輸入していたのである。

これに対して、かの遣唐船が黄河流域の洛陽（河南省）・長安（陝西省）から直接輸入しようとしたものの方は、日本に根づかず、立ち枯れた。

唐代の文化は日本に入って、ひからびた乾物になって保存されたが、宋文化は現在まで生命を

保って生きつづけているのである。

という宮崎市定教授の言葉(中央公論社版世界の歴史『宋と元』)は、私の立場からも首肯せざるを得ないものがある。

第一に最大の努力を払った律令制度の輸入は、そのはじめ、北魏の均田(計口授田、限田)にならったといわれる班田の理想が、天平十五年(七三三)に懇田永世私財の法を制した時点で崩れだし、平安朝にみられるとおり荘園の驚くべき増大を招いた。律令制度のもう一つの柱ともいうべき科挙は、ついに行われず、兵農一体の府兵制も、班田がうまくいっていないから、万葉の防人や竹芝の男子(「男級日記」の御垣守のように、いやだいやだになってしまい、官庁機構だけがお役人の洪水となって農民の上へのしかかり、それも紫微中台、藏人所、檢非違使庁、中納言、内大臣、関白といった調子で、令外の官(律令の規定にない機構・役職)が多くなり、結局は機構そのものの空洞化を招いた。御堂関白の時代になって、大化の改新以来の四百年を律令体制づくりの全過程として考えたら、おそらくあいた口がふさがらなかつたであろう。明らかにそれは大失敗であり、日本史の長い回り道に終つたものである。異質な地域の、異質な社会の制度を借りての改革——借り着の衣更え——だから、動きがとれなくなつても当然である。

また、奈良朝の日本は、明治のように先進国に追いつこうとして背のびをしたが、そうして輸入された南都六宗は平安朝になると置き去りにされ、日本仏教は長江流域の浙江省の天台山から最澄が比叡山にもたらした天台宗をもって再出発している。奇怪な現象はまだある。今日、詩といえは唐詩といわれるほど、詩は唐代文芸の華であるが、遣唐船はほとんどそのめぼしいものを持ち帰らなかつた。

阿倍仲麻呂(晁衡)が日本へ帰ろうとした時は、王維や李白まで彼のために詩を作っているのに、そういう李白の詩を日本にもたらしたというべきは雪村友梅、杜甫の場合も中巖円月、いずれも六百年後の五山の禅僧であるとは、なんたることであらう。八世紀の遣唐船とは、そういうものだったのである。文学どころではなかったらしい。

かように日本列島の場合、「政治は北から、文化は南から」であった。中国が南北統一をなしとげたと聞くと、日本列島は着物を着かえて挨拶にゆく。たいていその大統一が成って、二、三十年後である。隋の時は聖徳太子が小野妹子を遣隋使にした(六七〇)し、明の時は足利義満が使を派遣した(一五八二)し、中華人民共和国(一九四九)の今は田中前首相が国交回復にあたった(一九七二)。しかし、それは政治である。相手が漢民族の政府でないとなると、こういうことすらしない。元に対しては抗戦したし、清に対しては鎖国した。こういう点からみると、遣宋使をださなかった平安朝は、一種の鎖国をしていたのではなかったか。江戸時代だけを鎖国というのは、それが大航海時代以後なので、ヨーロッパを意識しての言葉であり、日中関係だけにしぼっていえば、平安朝も鎖国していたのである。しかし、宋商は来たり、日僧は往った。政治・外交と文化とは、日本列島では話が別になる。

この点が黄河流域といつもくいちがうところなのであって、北との緊張のなかで文化を創造した黄河流域にとっては、政治を抜きにして文化は考えられない。文化の観念がそもそも日本列島とはちがうのである。

長江流域は長江流域で、秦・漢以来、絶えず黄河流域に押しきられてきたから、政治には受身ではあるが、儒教にとらわれてもいないから、反乱に蜂起する時は、日本でいったら一向一揆のような民